

武蔵野日曜講筵 復活節祈禱会

主我一如

——ルカ伝第23章33～49節——

1978年3月26日

小池辰雄

終末的現実 絶望的存在 天国にいくか、地獄に落ちるか 十字架道 復活の生命 主我一如
 根源現象、根源現実 祈り

【ルカ23・33～49】

33 髑髏されこうべという処に到りて、イエスを十字架につけ、また悪人の一人をその右、一人をその左に十字架につく。34 斯くてイエス言い給う『父よ、彼らを赦し給え。その為す所を知らざればなり』彼らイエスの衣を分ちてくじ取りにせり、35 民は立ちて見いたり、司つかさたちも嘲あざむりて言う『かれは他人を救えり、若し神の選もび給いしキリストならば己をも救えかし』36 兵卒どもも嘲ちやうつ弄つつ近もよりて酸すき葡萄酒をさし出して言う、37 『なんじ若しユダヤ人の王ならば、己を救え』38 又イエスの上には『此はユダヤ人の王なり』との罪標ずてふたあり。

39 十字架に懸けられたる悪人の一人、イエスを譏そしりて言う『なんじはキリストならずや、己と我らとを救え』40 他の者これに答え禁いめて言う『なんじ同じく罪に定められながら、神を畏おそれぬか。41 我らは為なしし事の報むくを受くるなれば当然なり。然れど此の人は何の不善をも為なさざりき』42 また言う『イエスよ、御国に入り給うとき、我を憶おぼえたまえ』43 イエス言い給う『われ誠に汝に告ぐ、今日なんじは我と偕ともにパラダイスに在るべし』

44 昼の十二時ごろ、日、光をうしない、地のうえ遍あまねく暗くくなりて、三時に及び、45 聖所の幕、真中より裂けたり。46 イエス大声に呼よびわりて言いいたもう『父よ、わが霊を御手あがにゆだね』斯く言いいて息絶たえたもう。47 百卒長この有りし事を見て、神を崇あがめて言う『実にこの人は義人なりき』48 これを見んとて集まりたる群衆も、ありし事どもを見てみな胸を打ちつつ帰すれり。49 凡すべてイエスの相識しるべの者およびガリラヤより従きたい来れる女たちも遙はるかに立ちて此等のこときを見たり。

●終末的現実

ルカ伝23章のところですか。



33 されしうへ 髑髏という処に到りて、

「ゴルゴタ」「髑髏」という、名前からして非常に神秘的なところですが。

イエスを十字架につけ、また悪人の一人をその右、一人をその左に十字架につく。

『無者キリスト』の中にも私は書きましたが、この両側の十字架は罪人の処刑です。まん中の十字架だけは義人の処刑です。この右と左の罪人は、一方が砕けた魂で、もう片一方は奢れる魂、傲慢なる者です。人類はこの二つに分けられると私は申しました。実に不思議なことです。20世紀の人類の姿は、大方が傲慢の方で、これは滅亡です。ごくわずかな砕けた魂が救われる。非常にはつきりしてます。

たとえ21世紀が来ても、私は21世紀は決して祝福されたる世紀だとは思わない。あるいは、ノストラダムスの予言のように、20世紀で人類がどうかなくなってしまうかも知れない。要するに、どのみち終末的です。終末的現実です。終末的現実を迎える。これは原始の、キリストの時、使徒たちの時と同じことです。今の方がもっと深刻です。我々は滅びへの終末に面している。これは黙示録でもの凄い審判のことが書いてある。質的に20世紀もそんなんです。もし、そういう審判の現実が来たら、地球上は黙示録以上の恐ろしいことになる。もっと悲惨なことになる。

それは自ら来たらしめる。神さまは審判したくないけれども、やむを得ずしてそういうことになる。それは忍耐を重ねているところの羔の怒りなんだ。

「羔の怒り」

くらい逆説的な言葉はない。一番柔和なるものが怒るといふ。こういう言葉がなぜ、聖書の中に、特に黙示録に出てくるかと思う。そういう現実ですから、我々は少なくともこちらの遺れる民にならなくては。

● 絶望的存在

十字架上の盗賊と私たちとは質的には同じですけれども、使命は違う。こちらの盗賊は傲慢です。

「お前が神の子なら、まず自分を救い、俺たちを救ったらよかろう」

なんて言った。もう片一方は、

「私たちはさんざん悪いことをした。断罪されるのも止むを得ない。当然だ。

お前は当然なのに、なぜ、心を頑くなにしているか。なぜ、神を畏れぬか」

と言った。こちらは神を畏れました。平伏ひれふしました。畏れるとは平伏することです。

降参しなければ、平伏さなければ、参りましたと言わなければ、福音の世界に入れない。分かるの分からないの、研究のどうのこうのと、そんなことではないと私は言ったでしよ。本質的には我々はこれと同じなんです。キリストの山上の大告白に、モーセの十誡に我々



は及第できないんだ。パウロは及第したと思ったが、大間違いだった。マルチン・ルターは及第しようと思つて一生懸命やつたけれども、ダメだった。法然も親鸞もみんなそうです。及第しようと思つたけれどもダメだった。そこで、「南無阿弥陀仏」になった。「南無妙法蓮華經」になった。そうですよ。

十字架上はどっちも絶望の状態なんです。人間は手放しでは、自分に対しては実は絶望なんだ。絶望的存在なんです。失われた、

「パラダイス・ロスト」(樂園喪失)

なんです。こちらは絶望的存在でありながら、自分で打ち消して、絶望でないかのごとくしている。もう片一方は自分が絶望であることを自覚して畏れた。平伏した。キルケゴールが

「死への存在」

と言うけれども、実は絶望的存在なんです。しかし、我々は本当に絶望しないんだね。だから、芥川竜之助みたいに絶望して自殺する方がまじめな魂なんだ。有名な一文を草して華嚴の滝に身を投じた一高の学生がいた。自殺をいいと言っているのではないですよ。それだけ思い詰めれば、しようがないものである。

「ああ、我悩める人なるかな。この死の体^{からだ}」

とパウロが言いました。これは絶望的な叫びです。

「この死の体はどうにもなりません。けれども、救いはあなたでした」

と言つて、ローマ書8章にきて、ローマ書7章の地獄の苦しみから8章の天国の歓喜に移つた。これは、パウロはキリストの贖いの愛に救われて、御霊をいただいたものだから、そう言つた。生まれつきの我々はローマ書7章です。新生した我々はローマ書8章です。旧約でいうと、イザヤ書34章と35章です。そういうもの凄いはつきりしたコントラストです。

●天国に行くか、地獄に落ちるか

もう私たちは、いい加減な信仰では、やめた方がいい。Nさんは、このキリストの救いの生命さえあればあとはどうなつてもいいと言つて、はるばるやって来た。皆さん一人ひとりがつういいうわけです。

「終りまで耐え忍ぶ者は救われるべし」

とキリストが言つたが、

「集会は終りまで全うしろ」

ということ。大饗宴に招かれても、

「私はこれこれですから」

と——ルカ伝18章に書いてある——みんな理由を言つて逃げて行つた。キリストは、

「聖国の子らはダメだ。籬^{まがき}の外からいろいろな不幸な人を集めてこい。天国



「はこれらの人たちの行くところだ」

と。烈しいですよ、キリストは。いわゆる「アブラハムの裔」^{すえ}だなんて言つて、いい気になつてゐるのはとんでない話だと。冗談じゃないよ、あなた方。地上の人生は一遍しかありません。本当に天国に行くか、地獄に落ちるか、真剣勝負です。

この自我的な人間、いわゆる民主主義なんていうのはみんなこれだ。シルバートに若いのが腰掛けてへいちやらでゐる。小さい子どもを二人連れて荷物を下げて電車に乗つていても、誰も席をゆずろうとしないという。それが今の日本人の一般の姿です。腹がたつね、僕は正直。私はしばしばあそこで世話をやく。もうこの頃はいやになつたから、やめた。私は歳が上でもね、少し弱そうな人や子どもをもっている奥さんに、みんな私は席をゆずります。

しかし、責任は教育者にある。小学校から大学に至るまで、本当の魂の教育をしてないから、こういうことになつてしまつた。みんなこつち側の傲慢な人間を、身勝手主義の人間をつくつてゐる。日本はもう、見れば滅びの姿ですよ、「円高」とか何とか言つたつて。内村先生が、「もう、愛想をつかした」

と言つたのは本当だよ。もう半世紀も前に内村先生は愛想をつかしてしまつた。藤井先生は、「滅びよ」

なんて言つてしまつた。内村先生は1903年にもう日本の滅びの姿を見てしまつた。その通りに一遍滅びました、ひっくり返りました。明治維新のあの青年たちは捨身で自分の信念に殉じていつたんだ。

● 十字架道

私たちはこの十字架上の盗賊だけれども、いわゆる罪人ではない。本質は同じだ。けれども、今、私がこれから言うのはマタイ伝16章——マルコ伝8章、ルカ伝9章、ヨハネ伝にもあります——マタイ伝16章24節、

「²⁴ここにイエス弟子たちに言いたもう『人もし我に従^{きた}いらんと思わば、己をすて、己が十字架を負いて、我に従え。²⁵己が生命を救わんと思ふ者は、身勝手なやつは、これを失い、我がために、

あるいは、「福音のために」とマルコ伝には書いてある。

己が生命をうしなう者は、之を得べし。²⁶人、全世界をもうくとも、己が生命を損せば、何の益あらん、又その生命の代^{しろ}に何を与えんや。」(マタイ16・24)

ルカ伝9章24節には、

「²³また一同の者に言いたもう『人もし我に従いらんと思わば、己をすて、日々



おのが十字架を負いて我に従え」(ルカ9・24)と書いてある。十字架にかけられるのではなくして、十字架を負っていく。私たちのキリスト道は十字架道です。「己を捨てて」とキリストは言われる。

「捨ててかかれ、捨身だぞ」と。捨身と力んでも、なかなか捨身はできない。

けれども、ここに捨てられています。まん中に捨てられています。キリストは、「お前はここでもう捨ててあるではないか。自分の信仰がどうだ、実存がどうだ、聖書研究がどうだと、そんなことではない。私はお前をここに捨てたよ」と言う。パウロはそれに気がついた。

「キリストと共に十字架せられたり。はいっ、捨てられてありました」と、その他に何も無い。それが祈りなんですよ。

●復活の生命

「はいっ」と答えることのできるためには、キリストの中に入らなくては。このキリストの霊的な事実です。相対的歴史的な十字架ではありません。この霊的な事実の中に捨てられている自分に本当に気がつくんです。気がつくためには、本当に瞑想して祈りこまなければ、本当の気がつきにならない。

もう与えられていた事実なんです。そういう事実の中にあつたから。空気は、私たちは吸っている。空気に囲まれている。そういう事実の中にあるということに気がついていないんだ、みんなね。自分で生きていような顔している。空気がなければ、生きてられませんよ。キリストの救いというこの現実がなければ、魂は生きてられない。不断の事実です。

いつでも「南無阿弥陀仏」が言える。いつでも「南無妙法蓮華経」が言える。いつでも、「南無キリスト」

が言える。いかなるときも、あるがままの姿で。何も力む必要はない。あるがままの姿で「南無キリスト」と言える。

「キリストの中にいました、南無していました」と。現在完了です。

十字架されているから負えるんですよ。キリストと共に十字架されているから、負えるんです。負える力は復活のキリストの生命です。甦りのキリストの霊生が私たちにこの十字架をかわせてくれる。

「わが荷はいと軽し」

という。この終末的現実を、神の国を待ち望んでいる姿は、キリストと共に十字架を負っている人です。それが本当に待ち望んでいる人です。

復活の生命が来ているから、私たちは負えるんです。相手を担っている姿なんです、十



十字架を負うというのは。敵をも担っている姿が、十字架を負っているということ。迫害されたり、いろんなことになる。運命・環境いろんなことになる。全部、担わせられている。けれども、担いの力が、キリストの甦りの生命が来て、担わせている。どこに荷物がありますかなんてなわけだ。もの凄い力です。それは、この力には横綱もかなわない。それだけの無限無量な――無量寿無量光というが――そういうものが質的に来ていなかったら、つまらないです。

●主我一如

私が今日ここに掲げた「主我一如」というのはそのことです。主と我とは本当に一如に十字架を背負い、一如の生命の中にいるから。担いの態勢というのは、力んで言っているのではない。忍耐というなら、これほど力強い忍耐はない。人に何と言われようが、どう扱われようが、一向差し支えない。相手が気の毒でしようがない。本当にそうですよ。ありがたいですよ、本当に。何のかんの言つて、そんな低い相対的な次元でゴタゴタやっているかと。世界が違うんです。

この十字架はそういう十字架なんです。だから、キリストはこんな烈しい言葉を仰つた。それは弟子たちはできませんよ、このキリストに言われている時は。

「けれども、今にお前たちはできませんぞ」

と。それを使徒行伝でやってしまった、パウロもペテロもヨハネも。キリストの御霊の力が来てしまったから。だから、

「御霊を宿さざる者はキリスト者にあらず」

とパウロがはつきり言つた。御霊以前はいくら力んで偉そうでもダメだ。

キリストにひっくり返された。この聖霊の世界は、キリストの霊の世界は、それ以前の、いくら無教会がご立派でありましても、人間のご立派なんでもものではどうにもならん。私にはなにもケチをつけているのではない。質が違う、次元が違うんです。福音というのはそれ以下ではないから。まだ、私なんか言いきれないで困っている。聖書自身が言い切れないで困ってしまった。文字が奥から叫び呻いているわけです。凱歌をあげている。ときどき、パウロが凱歌を上げているではないですか。また、もの凄い呻きを発しているではないですか。

そういう根源の言葉の響きというものを受けとつていかななくては。そうしたら、読むだけで眼光紙背に徹するから。もう読むだけでもって、読むことが直ちに祈りです。一如の世界です。

捨てられているんだ。キリストの中に捨てられているんです。「己を捨てて」というのは、「己を私の中に捨てなさい。そうしたらお前は本当に私と一緒に一つになって行く」と。



「己を捨ててなんて大変なことだな」

と思う。ちつとも大変ではない。キリストの中に捨てればいい。いや実に捨てられていたんです、十字架上に。そうしたら、キリストの甦りの生命に圧倒されて来てしまった。豁然かつぜんとして開けた。

「求めよ、さらば与えられん」

という。

「私は与えたくてしょうがないんだよ」

とキリストが言われる。もう与えられていますよ。キリストの方では、

「求めよ、既に与えられてあり」

ということですよ。

「与えられてあるから、いよいよ追求していきますよ」

と、パウロがピリピ書でちゃんとそういうふうに言っている。

「追求してやまず。既に救われているから」

と。キリストが神さまの懐の中にいて一如になって、あれだけのことをなされた。私たちはキリストの中に入って、自分の思いにすぐることが展開していく。もうそれでなかつたら、つまらんですよ、「信仰」なんて言ったって。

「信仰」

なんていう言葉は本当はいらないんだ。

「一如」

でたくさんだ。一如、即如、即です。これが甦りのキリスト、永遠の生命のキリストと、一つになっていること。私たちがこの復活節を迎えたのは正にそのわけです。

● 根源現象、根源現実

そうしたらば、ここに書いてあるとおり、キリストがそういうことを言ったあとで、どうですか。変貌してしまっているでしょ。光り輝いてしまった。十字架を宣言したキリストは今度は変貌して、神の姿が、光がキリストに浸透してしまった。みんなぶったまげて、ぶっ倒れた。物理法則を完全に乗り越えてしまっているところのイエス・キリストは、たまらんですね。

祈りは本当はもう全部、異言の質なんです。言葉がもう言葉にならない。だから、電車の中であろうとどこであろうと、皆さん、この「一つ」です。直ちに、その中に入る。自分なんか全然問題でなくなる。それが祈りです。乗り移るんです。乗り移って居すわるんです、祈るといふのは。そういう有難い世界です。

この十字架のこっち側の悪人は天界に行った。別の方は地獄落ちだ。だから、この十字架を担って、人を天界に担い上げていく、これが本当の愛ということですよ。愛とは十字架を



負って人を救うこと。人を助け救うことが愛です。その極みは十字架のキリストです。もう、私は正直たまらんね、キリストというこの方は。あなた方も20歳そこらでこんな福音を聞いてしまつて、もつたいない話です。よく消化してくださいよ、消化不良にならないように。そして、今から何年かあとに、

「小池という変わり者が言ったのはやつぱり本当だった」と気づいてください。

これが根源現象、根源現実の世界です。それを地上で徴していかれたのがキリストです。世の末の黙示録の最後のところの世界を、私たちは本当に大希望をもつて待ち望む。大希望の現実が私たちの中に双葉の姿で来ているから。

祈りましょう。私がつ先に祈りますから。

「主さまー」

と一言、全存在をもつて発するところは直ちに天国ですよ。そこが天国です。何もエルサレムに行く必要はない。天のエルサレムは、「主さまー」と祈るその瞬間、そこにおいて来ているんです。即刻、ズレのない世界です。キリストはそういう現実で神さまに祈っていました。「大気よ」と言えば、私たちは大気の中にはいるではないですか。大気を吸っているではないですか。魂が「主さまー」と言えば、主の霊気が私たちを貫く。では、祈ります。

● 祈り

主さま。このような僕をちょうど20歳のときに、あなたは入信の最初のときを与えてくださり、もう半世紀以上もたちました。今、このようにしてやつとこ、あなたの福音の使徒的現実の中に招き入れくださつて、感謝いたします。このようなダメなやつですが、しかし、この福音を、主さま、私は一步も退かず、地上にあるかぎり叫び続けて参ります。東西南北から一切のこの世のいろいろなことを蹴飛ばして、終りまで残っていたこの兄弟姉妹たちの中に、主さま、あなたが今、この復活節の最後の祈禱会において、

「お前たちは私のものである。われ汝のうちに、汝わがうちに」

とパウロに語りかけてくださったところの現実が、またヨハネに、ペテロに、ヤコブに与えてくださったこの現実が、私たちの中に今浸透しつつあることを感謝いたします。もはや、私たちの側の何ものでもありません。あなたが本当に、私たちのために、この一人びとりのために十字架にかかりたまひ、そして、一切を処分してください、

「もはや何も心配はない。私の中に来なさい」

と、甦りの生命をもつてつかんでくださるから、感謝です。

あなたの御霊が私たちの中に息吹かけてまいりました。この福音書の中にその通りあるところの、復活と聖霊の事態を…(異言)…感謝いたします。

この兄弟姉妹たちが、今、主さま、あなたの中に本当に入れられて、今ここが即ち天国



であることを受けとつて、感謝いたします。この地上の相対的な現実とは、日々いろいろな形に変わつていきます。そんなことに目をくれません。あなたはここに、私たちを通して本当の天国的現実を現象せしめてください。このような終末的な世界に今、私たちは臨み、この危機的20世紀も末になつてきました。いよいよ聖国が近くなつて参りました。

私たちはこの聖国を本当に地上において現れることを私たちの使命とし、あなたの十字架を負つて、私たち一人びとりが十字架を負わされています。しかし、その力はあなたが来ますから、感謝いたします。かくして、人を救い上げ、人を助け上げるところの力があなたから来て、この復活の甦りの力を、どうぞ、人々に与えることができますように、いよいよお進みください、またそこに貫きくださらんことを、切に願ひ奉ります。今ここに

あるところの兄弟姉妹たちがその力を得て進んで参ります。

心からの感謝と讃美を、御名によつて捧げ奉ります。アーメン。

